

# 2014 年度 武蔵大学の創造的な教育実践

## はじめに

本報告書の第Ⅰ部から第Ⅲ部では、FD委員会・FD実施委員会が中心となって行ったFD活動の内容や結果をとりまとめた。この第Ⅳ部では、武蔵大学の教育のなかで行っている個々の教育実践について報告する。

全体は5つの部分からなっている。最初の報告は、「学部横断型課題解決プロジェクト」についてである。この授業は、3学部の学生が協働して協力企業のCSR報告書を作成するという課題に取り組み、その過程を通じて学生の社会人基礎力の育成を行おうとするものである。本学の教育を特徴づけるもののひとつであるこの授業について、2014年度の内容や成果などが記されている。これに続く3つの部分は、経済、人文、社会の各学部が学部全体として取り組んでいる教育実践の報告である。経済学部に関しては、ゼミナール活動の成果をプレゼンテーションする「ゼミ対抗研究発表大会」について報告されている。また、人文学部と社会学部に関しては、卒業論文などの成果を発表する「卒業論文報告会」（人文学部）と「シャカリキフェスティバル」（社会学部）の成果が報告されている。そして最後の「特集：武蔵大学の教員の取り組み」は、新宅広二FD研究員が、山崎秀雄准教授（経済学部）、高橋一樹教授（人文学部）、田中俊之助教（社会学部）にインタビューを行い、それぞれの教員の授業における教育実践などについてをとりまとめたものである。

（文責：清水 敦）

## 1. 学部横断型課題解決プロジェクト

経済学部教授 高橋 徳行（運営チームリーダー）

この授業は、2008年度に正規授業となり、今年度で足かけ7年目を迎えました。

2014年度は、前学期、後学期ともに2つのクラスを開講しました。前期、後期の学部・学科別の履修者数は次のとおりとなっています。内訳をみると、前期は（2クラス合計）、経済学部が16名、人文学部が14名、そして社会学部が13名の合計43名、後期は（2クラス合計）、経済学部が18名、人文学部が18名、そして社会学部が19名の合計55名です（表1）。

昨年度と比較すると、前期が6名減（平成25年度前期49名）、後期が2名減（平成25年度後期57名）となりました。

表1 2014年度学部横断型課題解決プロジェクト履修生

セメスター 学科	2014年度前学期 (全員3年次生)	2014年度後学期 (2～3年次生)
経 済	2名	4名 (2年次生)
経 営	11名	11名 (2年次生)
金 融	3名	3名 (2年次生)
英語英米文化	2名	6名 (2年次生)
ヨーロッパ文化	5名	10名 (2年次生9名、3年次生1名)
日本・東アジア文化	7名	2名 (2年次生)
社 会	8名	14名 (2年次生13名、3年次生1名)
メディア社会	5名	5名 (2年次生)
履修生合計人数	43名	55名

この授業は厳密な定員制度を設けてはいませんが、およその目安としては、1クラス当たり30名（各学部から10名。1クラスあたり2つのチームを結成するので、1チーム当たりの1学部の上限は5名）が目途ですので、前学期、後学期ともに履修生の上限は、各学部が20名、合計60名です。ですから、上限を100%とした場合の、定員充足率は、全学部単位でみると前学期は71.2%、後学期は91.2%となります。いずれにしても、2014年度も合計98名の学生が履修しており、1学年定員（930名）の1割以上の学生が今年度も履修しました。

就職活動の開始時期が後ろ寄りになったにも関わらず、後学期に履修する3年生の数が少ないという傾向は今年度も見られました。今年度後学期に履修した3年生はわずかに2名と、昨年度（2013年度）の10名に比べてもさらに減少しています。しかし、後学期に履修した3年

生の満足度が決して低いわけではなく、聞き取りによるものですが、かなり高いと思われます。

履修生を男女比で見たものが表2です。前学期は男性15名、女性28名（男性比率34.9%）、後学期は男性19名、女性36名（男性比率34.5%）と、前学期、後学期ともに女性割合が男性を大幅に上回っています。

表2 2014年度学部横断型課題解決プロジェクト履修生(学年・学科・性別)

履修曜時限	2014年度 前学期		2014年度 後学期			
	3年次生		3年次生		2年次生	
学年 性別	男	女	男	女	男	女
経済	0	2	0	0	2	2
経営	6	5	0	0	6	5
金融	2	1	0	0	1	2
英語英米文化	1	1	0	0	0	6
ヨーロッパ文化	0	5	1	0	2	7
日本・東アジア文化	0	7	0	0	0	2
社会	5	3	0	1	5	8
メディア社会	1	4	0	0	2	3
履修生合計人数	43		55			

この授業は2つの柱から成り立っており、一つが、課題提供企業のCSR報告書の作成、もう一つが社会人基礎力の育成と社会人基礎力の自己評価能力を高めることです。

表3は、後者の社会人基礎力に関するデータになります。通年の平均値で見ると、受講前（事前評価）と受講後（事後評価）の比較で最も伸びた要素は、働きかけ力、実行力、そして課題発見力の3つが、同点首位（事後－事前が1.8ポイントのプラス。ただし、それぞれの要素については10点満点で学生が自己評価している）となっています。一方、伸びたポイントが最も少なかったのは、同じく通年の平均値で見ると、規律性の0.4ポイントでした。

しかし、ポイントの変化で見ると、規律性は最も「伸びなかった」能力と言うことができますが、規律性は事前評価の段階で、12項目の中で最も高かったこと（事前評価で7.7ポイント）にも注目しておく必要はあります。

社会人基礎力は、細かくは12の要素に分かれています。大きくは、前に踏み出す力、考え抜く力、そしてチームで働く力の3つのカテゴリーに分かれています。この3つのカテゴリーで見ると、チームで働く力はもともと水準が高いが上昇幅は小さい。一方、前に踏み出す力と考え抜く力はもともと水準が低かったが、上昇幅が大きいという傾向が見られます。

表3 社会人基礎力の事前・事後自己評価【2014年度履修生】(学生による自己評価)

カテゴリー/要素		事前評価	事後評価	差異(事後-事前)
通年⑫要素平均		6.5	7.9	1.4
1. 前に踏み出す力(通年)		6.2	7.9	1.7
①主体性	前学期	6.8	8.5	1.7
	後学期	6.6	8.0	1.4
	通年	6.7	8.2	1.5
②働きかけ力	前学期	6.1	7.7	1.7
	後学期	5.8	7.7	1.9
	通年	5.9	7.7	1.8
③実行力	前学期	5.9	8.2	2.3
	後学期	6.2	7.7	1.5
	通年	6.1	7.9	1.8
2. 考え抜く力(通年)		5.7	7.2	1.5
④課題発見力	前学期	6.3	8.3	2.0
	後学期	6.1	7.7	1.6
	通年	6.2	8.0	1.8
⑤計画力	前学期	5.6	6.8	1.2
	後学期	5.6	6.8	1.2
	通年	5.6	6.8	1.2
⑥創造力	前学期	5.7	7.3	1.6
	後学期	5.2	6.7	1.5
	通年	5.4	7.0	1.6
3. チームで働く力(通年)		6.9	8.1	1.2
⑦発信力	前学期	6.7	7.9	1.2
	後学期	6.3	7.8	1.5
	通年	6.4	7.8	1.4
⑧傾聴力	前学期	7.4	8.6	1.2
	後学期	6.7	8.2	1.4
	通年	7.0	8.4	1.3
⑨柔軟性	前学期	7.3	8.6	1.3
	後学期	7.0	8.1	1.1
	通年	7.1	8.3	1.2
⑩状況把握力	前学期	6.5	8.2	1.7
	後学期	6.3	7.9	1.6
	通年	6.4	8.0	1.6
⑪規律性	前学期	7.8	8.3	0.4
	後学期	7.7	8.1	0.4
	通年	7.7	8.2	0.4
⑫ストレスコントロール力	前学期	7.0	8.4	1.4
	後学期	6.8	8.0	1.2
	通年	6.9	8.1	1.3

今年度（2014年度）に課題を提供いただき、授業に協力していただいた企業は、しのはらプレスサービス株式会社、株式会社スズキプレシオン、株式会社ダイワハイテックス、東成エレクトロビーム株式会社、エーザイ株式会社、カインズ株式会社、株式会社ラクーン、そして株式会社リガルジョイントの8社です。

この中で、エーザイ株式会社は、多くの人知っている会社と思われるかもしれませんが、そのほかの7社については、初めて名前を聞く会社がほとんどだと思います。しかし、例えば、ラップに包まれている、本屋さんで売られている漫画本を見たことのない人はいないでしょう。その装置を、日本で初めて開発したメーカーは、この7社の中の1社です。

ほかにも、私たちのさまざまな生活の中で使われている、多くの製品や商品は、プレス加工という工程を経たものですが、そのプレス加工をする機械のメンテナンスなどの分野で、圧倒的な存在感を有している会社も含まれています。

このように、名前自体は有名でなくとも、世の中でしっかりとした役割を果たしている企業と触れ合うことで、学生の社会に対する視野を広げるといふ狙いも、この授業は担っています。



活発に意見を交わす履修生

## 2. ゼミ対抗研究発表大会（経済学部）

経済学部専任講師 田中 健太（ゼミ大会運営委員）

武蔵大学経済学部では、2004年よりゼミ対抗研究発表大会（以下、ゼミ大会）を行っています。今年度も2014年12月13日にゼミ大会を実施しました。ゼミ大会は学生を主体とするゼミナール連合会が主催し、教員のサポートの元、各関連部署との連携を図り実施を行っています。ゼミ大会では学部2、3年生のゼミが参加し、日ごろのゼミナール活動の成果を発表し、競い合います。ゼミ大会では各ゼミの発表内容に合わせて発表ブロックが決まり、その各ブロック内の発表の内容から学内の教員と学外の社会人（本学OB、OG）の評価をもとに、優勝を決定します。各ブロックの優勝ゼミ、準優勝ゼミには賞金が授与されます。多くのゼミがゼミ大会での優勝をめざし、日ごろからゼミナール活動に力をいれています。

2014年度は31チームが参加し、7ブロック（経済ブロック、経営ブロック、金融ブロック、会計ブロック）に分かれ、大会が行われました。各ブロックの発表では実社会で応用可能なより実践的な発表だけでなく、日本や世界で起きている様々な社会の重要な問題を学術的に分析する発表も行われました。これまでの大会を継続してきた結果、各ゼミの発表の質が向上しているという社会人審査員の方々からのコメントも多くいただきました。単発的な取り組みではなく、本大会のような継続的な取り組みを行うことで経済学部の学生全体の教育効果を大きく引き上げていることが確認されました。

今後の課題としては外部に対する教育成果の発信もより必要となってくると思われます。現在のゼミ大会では外部からの聴講者も多数、来場していただいておりますが、まだまだ外部への発信が不十分です。現在の社会では社会に対して自らの意見や考えたことを発信し、多くの人たちと議論することでより自分の社会的なスキルを向上していく必要があります。そうした意味でも、学生が今後の社会にでる社会人としての能力を培っていくためには自らの意見を発表するだけでなく、より外の社会や様々な人と相互に学べる機会や仕組みが必要であり、ゼミ大会をより一層、有意義なものにする課題のひとつと考えます。



ゼミ大会の様子

2014 年度ゼミ大会・参加ゼミ一覧

ブロック	ゼミ名	テーマ
経済 A	後藤 2	ソーラーシェアリング
	田中 2	ビジット・ジャパン事業の実態と今後の課題
	二階堂 2	教育格差大国インドネシア
	杉本 B	日本農業、空を飛ぶ～新しい輸出システムの構築
	松川(猪瀬)B	富士山の問題を考えよう～環境と観光
経済 B	東郷 1	世界の貧困
	二階堂 1	途上国におけるモバイルの貢献
	杉本 A	学生ベンチャー
	田中 1	消費税の経済への影響～日本がとるべき政策
	茶野(林)1	ビックマック指数を用いた最低賃金の調査
経済 C	吉田 2	プロ野球球団が地域に与える経済効果
	黒坂 2	新・日本海外展開戦略～開国裕民センター創設
	横川 A	インドネシア経済について～経済発展の罫
	大野 2	為替レートはなんで動くか？
	東郷 2	日本の貧困
経営 A	高橋 2	中小企業の後継者問題～親族への継承と第三者への継承の問題点
	目時(福島)2	BOP ビジネスの多様性～インタビュー調査を通じた比較研究
	板垣 2	スポーツによる地域活性化
	古瀬 2	コース・マーケティングの可能性～子どもの社会貢献意識の向上に向けて～
経営 B	河合 2	道の駅ブームについて
	板垣 1	ファストファッション
	山崎 1	老舗×大学生～伝統と若い力の融合
	高橋 1	社会企業家への真の支援とは～創業の観点から
金融	神楽岡 2	リスクのある投資オプションの評価～リアル・オプション
	安達 B	水産業から考える TPP の是非
	鈴木 2	V-CAMP
	茶野(林)2	銅価格の変動要因
会計	安達 A	逆イベントスタディを株式投資に活かす
	海老原 2	経営者交代と利益マネジメント
	荒田 2	企業買収における割安購入は何故生じるか
	目時(福島)1	クロスメディア戦略の有効性

注)ゼミ名横の 1、2 という数字は専門ゼミ第 1 部(2 年生)、第 2 部(3 年生)を表している。  
また、A、B は縦割りゼミ(2、3 年生合同)を表している。



### 3. 卒業論文報告会（人文学部）

人文学部教授 角田 俊男（人文学部教務委員長）

人文学部では全学科の学生に必修としている卒業論文の成果を発表する機会として、毎年1月末に卒業論文報告会が開かれています（英語英米文化学科の英語コミュニケーション・コースの学生は卒業論文の代わりに「英文エッセイ」を執筆することになっています）。指導教員から完成度やユニークな内容の点で推薦を受けた卒業論文・英文エッセイについて4年生が各学科10名前後要旨を報告し、翌年度に卒業論文・英文エッセイを作成する3年生を中心とした在学生在が聴講するとともに、ご父母、外部の方々にも大学ホームページ、出身高校への案内などで告知して（今年度は毎日新聞サイトにも掲載されました）、ご参加いただき、報告後に質疑応答が行われます。今年度は1月29日（木）午後1時から8号館の3教室に学科ごとに分かれ、次のような多数の興味深い多彩なテーマで報告がなされました。各自の報告時間は、質疑応答時間を別に設けて英語英米文化学科が15分、ヨーロッパ文化学科が25分、日本・東アジア文化学科は個々の質疑応答を含めて30分と学科ごとに違うように、学科の教務委員の先生方が中心となって学科の特色も生かしながら企画運営を行っています。

#### <英語英米文化学科（英語の題目は英語による報告）>

ヴィクトリア期における教育と階級

It's Time to Be Really Global: How Can Japanese People Communicate in English More Practically?

メジャーリーグ経営論—160億円を投資できる理由—

Islamophobia and British Muslim Identity post 9/11

Cultural Diversity in Australia: In the Case of Deakin University

Concerning Affirmation of Capital Punishment by Kant on the Basis of Deontology

米国アリゾナ州移民法にみるメキシコ人不法移民

What Is the Main Factor in NIKE's Success?

Buddhist Concepts in *The Matrix*

#### <ヨーロッパ文化学科>

黄金時代の海賊—彼らの求めた理想の生活—

騎士から王子様をたどる—白馬の王子様論—

リヒテンシュタイン侯家の秘宝—その歴史と現状—

18~19世紀ボルドーにおける都市と外国人商人

『レ・ミゼラブル』における公園と下水道

ヨーロッパにおける国民国家と国歌—フランスを中心に—

ヨーロッパの酪酊思想—プラトン、セネカ、モンテーニュを中心に—

サン＝テグジュペリと宮沢賢治の作品にみる幸福観

日本とフランスにおけるホームレス支援の比較

#### <日本・東アジア文化学科（英語の題目は英語による報告）>

歌川国芳「蝸と熊の角力」を読む

チベットの聖地巡礼—カイラス巡礼を中心に—

The Chinese in Australia: From the Viewpoint of the Recent Immigrants

保科正之の思想と社倉法

前漢の高祖、劉邦の肅清活動について

このように人文学部の3学科が対象とする諸地域の社会と文化についての学際的な教育研究が反映されています。卒業論文・英文エッセイを4年間の「学業の集大成」として必修とすることで、学部のディプロマ・ポリシーが目標としている「自発的な調査能力、データを整理・分析する力、総合する力、文章構成力、口頭による説明能力と現代的ツールを用いた情報伝達能力、意見交換（対話）を多角的に行って自説の客観性を高める力」を実践的に学ぶ機会を与えていますが、卒業論文報告会は報告の内容やレジュメなどの配付資料、パワーポイントなど映像情報機器の利用などから、この目標の達成度をはかる指標ともなっています。12月初旬の卒業論文・英文エッセイ提出後、卒業前の貴重な自由時間を割いて、この報告会へ向け準備を進め、分りやすい言葉で報告をしてくれた4年生は、3年生からの様々な質問に答えるとともに、テーマの選び方など今後卒業論文を書く上での後輩へのアドバイスや励ましも与えてくれました。通常卒業論文指導は指導教授と4年生との間の個別指導やゼミナールの受講者間での発表が中心となりますが、ここでは学年と卒業論文指導ゼミナールの単位を超えた広い対話の場となっています。

3年生にとっては、卒業論文準備ゼミナールの一環ともなっていて、学科によっては、出席を義務付けて、それぞれの報告ごとにキーワードと質問・コメントをメモする用紙を提出するようにしているところもあり、多くの学生が参加し質疑応答にも積極的に加わっています。自分が卒業論文で書こうと思っている関心のある分野で新たなテーマを発見し、関連する卒業論文を書いた報告者に具体的な質問をして、卒業論文を書く上での苦労や工夫を直接聞くことができるなど、これから卒業論文を書く意欲を高める1つの契機ともなっています。

今回3学科すべての報告会の様子を部分的に実際に拝見することができましたが、どの学科も報告者は落ち着いて説明し、それを出席者が静聴していました。これから卒業論文を書く学生にはそのテーマ関心によっては他学科の報告も聞いて参考になるという場合があるかもしれないと思われました。さらに学科を超えて、例えば現代オーストラリアの多文化主義・移民についての英語による報告が英語英米文化学科と日本・東アジア文化学科の両方で行われたことなど、共通の問題関心を追究する可能性も示唆されました。教員の関与の度合いについても、学生のみ発言に限定している学科と教員が時に応じて論点の評価・解説や質疑応答を補助したりする学科もあり、これまでの経緯と必要に応じて様々です。今後も検討し改善すべき点として、報告する4年生に卒業論文・英文エッセイの豊かな内容を短時間でどのようにまとめ効果的に伝えるかについて指導を徹底すること、3年生の出席者数を増やし、質疑応答がさらに発展するような3年生への指導、報告会の運営の工夫をはかることが考えられます。これらを通して、さらにこの卒業論文報告会が発展していくように努力する必要があります。なお報告会には参加できなかったが指導教授から推薦のあった数名の学生も加えた卒業論文の要旨をまとめた『卒業論文成果報告書』も翌年度の始めに発行しています。



卒業論文報告会の様子

#### 4. シャカリキフェスティバル（社会学部）

社会学部准教授 安藤 丈将（シャカリキフェスティバル担当）

シャカリキフェスティバルは、社会学部の卒業論文・卒業制作の成果を発表するための機会として2009年度から始まり、本年度（2014年度）で第6回となりました。「シャカリキ」という言葉には、「社会学の力」という意味と「がむしゃらに頑張る」という意味が込められています。ゼミごとに報告者を選出しますが、その中で競い合うというよりも、多様な成果をお互いに披露しあう形で行なわれており、卒業する4年生を中心とするお祭りでもあります。

本年度のシャカリキフェスティバルは、2015年1月29日（木）に、1号館の3教室（1101・1001・1002）を用いて行われました。設定された部会数は9部会で、卒業論文19点と卒業制作9点の合計28点の発表と質疑応答が行われました（当日、体調不良により1名欠席）。卒業論文は、社会学科・メディア社会学科の各ゼミから1点ずつが代表として選ばれています。卒業制作については、卒業制作を選択した学生のいるゼミから代表が選出されています。

当日のスケジュール、および開催された部会名、発表タイトルは、以下の通りです。

A会場:卒業論文(1001教室)

13:20～13:30		開会宣言(安藤)	
13:30 ～	部会 A1 司会:松井	小田原ゼミ	言葉とファッションに見る女性像の変化
		大屋ゼミ	若い女性はなぜスイーツ店に並ぶのか—欲望への欲望と価値創造
		矢田部ゼミ	「男の娘」という新たな欲望の喚起—「男なのに」によって生じる魅力
14:50～15:00		休憩(10分)	
15:00 ～	部会 A2 司会:中西	松井ゼミ	さとり世代の結婚観とその戦略
		菊地ゼミ	婚活は日本を救えるのか?—新しい職縁結婚の可能性—
		千田ゼミ	女子サッカーに向けられるまなざし—雑誌の分析から—
16:20～16:30		休憩(10分)	
16:30 ～	部会 A3 司会:千田	安藤ゼミ	観光農園の社会学—再帰的近代化とポスト生産主義の観点から—
		石森ゼミ	都市における農の活動が生み出すコミュニティ—練馬大根育成成事
		中西ゼミ	なぜ女性は地域移動をしないのか—母娘ケア役割の呪縛—
		橋本ゼミ	ゆるキャラの社会学

B会場:卒業論文(1101教室)

13:20～13:30		開会宣言(林)	
13:30 ～	部会 B1 司会:石森	粉川ゼミ	日本におけるハロウィンの受容
		内藤ゼミ	日本社会における刺青の社会学—刺青とは負の刻印か?—
		瀧本ゼミ	記憶を伝える—「語り部」の活動から見える被災地の今—
14:50～15:00		休憩(10分)	
15:00 ～	部会 B2 司会:大屋	山下ゼミ	若者の買い物志向とブランドエクイティの可能性
		土橋ゼミ	欲望の低下を見るファッション文化の今
		アンジェロゼミ	多様化する大学新聞—東京都内の私立大学新聞を中心として—
16:20～16:30		休憩(10分)	
16:30 ～	部会 B3 司会:山下	尾形ゼミ	趣味が何をもたらすのか—趣味という存在の社会関係資本、生活
		江上ゼミ	日本の新刊書店が生活者にもたらしているもの
		中橋ゼミ	マンガの読書経験の違いは読み解きに影響するか

C会場:卒業制作(1002教室)

13:20～13:30		開会宣言(永田)	
13:30 ～	部会 C1 司会:アンジェロ	奥村ゼミ	ママも一緒に絵本を聴こう
		奥村ゼミ	変わる散骨のカタチ—なぜ彼女は散骨を選んだのか—

		奥村ゼミ	大都会の片隅の畑で彼女は自然を学ぶ
14:50～15:00	休憩(10分)		
15:00 ～	部会 C2 司会:奥村	中橋ゼミ	赤い父親、青い母親
		中橋ゼミ	写真にこめられたヒミツ—タブレットが可能にしたメディア・リテラシー
		瀧本ゼミ	復興のための音楽フェスは若者の意識を変えるか
16:20～16:30	休憩(10分)		
16:30 ～	部会 C3 司会:粉川	奥村ゼミ	トンカチ片手に木がキてます—樹木医の伝える都会の木々の悲鳴
		アンジェロゼミ	とあるSNSの群像—創作系コミュニティサイト『Only My Music』—
		アンジェロゼミ	WARABI LIVING GUIDEBOOK
記念品贈呈式+懇親会(学生食堂ホール+学生ホール)			
18:00～20:00	記念品贈呈式+懇親会		

シャカリキフェスティバルで報告する代表の選出は、それぞれのゼミによってやり方が異なります。学生がそれぞれの卒業論文・卒業製作を発表したうえで投票するケース、希望者が立候補するケース、あるいは教員が指定するケースがあります。代表に選ばれることは、学生にとって名誉なことです。シャカリキの代表という目標があることは、卒業論文と卒業製作に対するモチベーションを高めることにつながります。

12月上旬に卒業論文と卒業製作を提出して一息つきたいところですが、シャカリキの代表は、報告の準備をしなければなりません。この準備は、代表者だけでなく、しばしばゼミの他の学生の協力のもとに行なわれます。効果的に相手に伝えるため、熱心な議論がゼミ生の間で交わされ、それがプレゼンテーションの質を高めます。代表は、他のゼミ生のサポートを受けながら、シャカリキの舞台に上がるのです。

シャカリキフェスティバルは、異なるゼミ間の交流という意味合いもあります。各ゼミで縦割りになってしまいがちですが、シャカリキで他のゼミの代表の報告を聞くことで、異なるアプローチや視点を知り、広い視野を持つことにつながります。3年生以下は、優れた報告を聞くことで、自分自身の卒業論文と卒業製作に対するヒントを獲得します。

このように、シャカリキフェスティバルは、4年生にとっては優秀な卒業論文と卒業製作の発表の場としてだけでなく、3年次からの2年間のゼミの集大成としての側面を持っています。さらには3年生以下には、自らの卒業論文と卒業製作に関する学びの場としての機能も果たしています。



シャカリキフェスティバルの様子

## 5. 特集：武蔵大学の教員の取り組み

### 経済学部 教員から見た武蔵大学の“ゼミ環境”の優位性

取材協力：山崎 秀雄 准教授（経済学部経営学科）

本年度より武蔵大学に着任された山崎秀雄准教授に、本学の学生の特徴やその特性に合わせた授業アイデアのポイントなどを伺った。山崎准教授の専門分野・研究領域は、戦略経営論、イノベーション・マネジメント。学部担当科目は、専門ゼミナール第1部、プレ専門ゼミナール、イノベーション論、ケース・ディスカッション、経営学基礎。大学院担当科目は、経営戦略、経営学演習、経営戦略特殊研究である。

山崎准教授は、特にゼミの授業改善・開発に重点を置いており、他大学にてゼミが初年次から必修となっているカリキュラムを10年以上授業指導された経験から、武蔵大学のゼミにおける重要なポイントとして、『ゼミの武蔵』というキャッチコピーの存在を挙げている。それは、ゼミナールという少人数の学習環境や授業スタイルを“望んで”入学してくる学生が多いことが重要であるという。他大学では、同じ様なゼミナール型カリキュラムでも、“ゼミ”を理解しないまま卒業する学生も少なくない。他方、武蔵大学では、大学案内をはじめ、オープンキャンパス、ホームページなどで“ゼミ”についての説明や多くの事例が紹介されている。そのため入学時から、高校生はあまり馴染みの無い主体的な授業スタイルに対して、入学時から高いモチベーションを持つ学生が多く、これが教員にとって主体的な学習の導入のしやすさに結びついているという。初年次でも講義形式の授業とゼミの違いについて学生の理解がおおむね早いことは、他大学にはない大きな特色だとの指摘もあった。これは武蔵大学ならではの広義の高大接続教育といえ、真の“大学での学び”になっていると考察できる。

一方でこうした特徴は、高年次になるにしたがって学生のゼミに対する期待や士気が、ともすると低減してしまうリスクもはらんでいる。これはゼミに対しての入学前の期待値のより戻しや、あるいはゼミに限らず大学での学習環境の慣れなど、要因は様々なことが考えられる。現状では授業態度や授業アンケートでの満足度が有意に下がっているわけではないが、FD課題として今後の分析・改善の検討余地があることを示唆している。

このように山崎准教授は、他大学の授業事例を踏まえて、武蔵大学の校風や学生の能力に合わせて本年度は細部にわたってアイデアを盛り込んだ授業を行っている。

例えば、ゼミでは一般的な専門書の輪読に加え、アクティブ・ラーニングの手法を取り入れ、実践的な社会人基礎力の準備として多くの企業が望んでいるイノベティブな人材育成を意識した授業デザインとなっている。知恵を絞り、今までにない発想やアイデアで社会が直面する問題を解決する手段を重要なイノベーションとして捉え、イノベーションを推進する力、すなわち新たな発想やアイデアで問題解決を図る力を身につけることを到達目標としている。

そのための特別企画として本年度は2名のゲスト講師を招き、授業にアクセントをつけたユニークな取り組みも行われた。

外部民間企業でリーダーシップ開発に携わっているスペシャリストに、企業研修等でも使われる「砂漠サバイバルゲーム」（砂漠に飛行機が不時着したという想定で、チーム全員が生き残る方法を考えるゲーム）を用いたプログラム、管理栄養士の先生に現代の若者の健康問題のレクチャーの後に、「過剰に“やせ願望”をもつ女性に対してどのような取り組みが有効か」



というテーマを学生に与え、その解決方法を議論させるといった内容である。2つはまったく異分野のテーマだが、学生たちが今までに直面したことのない問題の解決に挑むという点では共通している。いずれに対しても学生が主体的に考え互いに意見を出し合い、かつ経営学の知識を随所に活かしながら、斬新で有効な問題解決法の提示を導き出すような教育指導を行っている。このように、アクティブ・ラーニングの手法をベースに外部講師の活用や異分野の課題の提示といったアクセントを加えることで、イノベーションを推進する力という経営学や社会人基礎力につながる専門的かつ実践的な能力開発が試みられている。

最後に、授業の雰囲気作りについて、以下のような言及もあった。学生には失敗体験も大切だが、同時に成功体験も大切である。例えばアクティブ・ラーニングのプログラムの中で自分のアイデアが多くの人に支持されたといった成功体験は、その学生の自己効力感やその後の学習意欲にプラスの影響を与える可能性が高い。学生がそうした体験をより多くのできるような場作り、環境作りにも心がけているとのことであった。

(文責：FD 研究員 新宅 広二)



ゲスト講師を招いた授業風景。リーダーシップ開発（左）と栄養学（右）。（ゼミブログより写真引用）

## 人文学部 思考方法に刺激を与えるゼミのフィールドワーク

取材協力：高橋 一樹 教授（人文学部日本・東アジア文化学科）

武蔵大学に着任して3年目を迎えた高橋教授に、本学の特色を踏まえた今後のFD課題について伺った。高橋教授の専門分野は、歴史学（日本中世史）、史科学。学部担当科目は、日本中世史演習、日本・東アジア文化基礎ゼミナール/比較文化入門演習、日本文化と東アジア、日本環境文化史、日本中世、卒業論文準備ゼミナール、卒業論文ゼミナールである。

まず、他大学と比較した武蔵大学の学生の特徴として、学力や家庭環境が比較的平均的で通学圏も概ね近隣に偏っているという特色を挙げている。そして、入学時には具体的に明確な将来像を持つ印象が弱いものの、大学へは「学問を学ぶ」目的のためにきている姿勢を強く感じられるという。

人文学部の場合、この弊害で就職“希望”率の低下を注視しなくてはならないものの、学生には学問を深掘りしようとする姿勢と、その上で自らの進路を熟考する特性が見られることか

ら、就職に直結する資格や内容に偏重した教育ではない、大学の風土に合った授業設計となっている印象があるとのことだった。

教育の質保証に関しては、4年間の集大成にあたる卒業論文を教育成果・教育財産としてアーカイブ化していくことを提案されていた。卒業論文は基礎学力の積み重ねと学問ごとのリテラシー、学びの経験を活かした広い視野と知的好奇心など、多くの学びの成果を視覚化・共有化できる最良のものだという。卒業論文の執筆指導は教員の負担が大きいものの、小規模校の教育環境が最も活かせるものの一つとだという。

さらに、今後の課題として、学生の知的欲求を促進するための、学部・学科間の連携強化の必要性について、それぞれの分野で先端的な研究者である教員を活かしきれていない点が懸念されるため、教員間の情報共有の場や、共有する“雰囲気”を開放的にしていくことを改善点にあげていただいた。ゼミが充実している一方で、学問・研究領域を横断した研究指導に関しては、未だ発展的な可能性を残しており、制度化ではなく教員同士の連携による改善がキーになると分析されている。

担当の基礎ゼミでは、あえて一般書を教材に使い、自分の考えではなく、筆者（研究者）の対立意見（学説）を抽出させて、その論点をまとめて繰り返し発表させるという授業スタイルをとっている。高校までのマスプロ教育的な部分から、高等教育のアクティブ・ラーニング型授業に移行できるような形を初年次で取り入れている。この手法で学問的なリテラシーや考察力が徐々に身につけていることが実感できるという。

さらに担当ゼミナールにおけるユニークな取り組みとして、中世武士の子孫に伝来した古文書を読み解き、そこから教科書には載らないような地域の歴史を掘り起こしていく作業を積み重ねていくようにしているという。

例えば授業で購読した文書群が13世紀半ばの鎌倉に関する記述が目立ったことから、ゼミ学生で史料のコピーと地図を片手に鎌倉市内の現地を歩くフィールドワークを取り入れて、フィールドワークを通じた教育スタイルによって、学問の奥深さとリアリティの伝承を実践されている。

（文責：FD 研究員 新宅 広二）



フィールドワークを通して五感の刺激を重視した授業になっている。（ゼミブログより写真引用）

## 社会学部 基礎科目から専門領域への接続授業の重要性

取材協力：田中 俊之 助教（社会学部社会学科）

他大学での非常勤講師勤務を経て、2013年度より武蔵大学社会学部に着任された田中助教に、学部横断型課題解決プロジェクトやFDについての取り組みについて伺った。なお、田中助教は、今年度の大規模クラス部門での「学生が選ぶベストティーチャー賞」を受賞されている。

田中助教の専門分野・研究領域は、男性学、キャリア教育論。学部担当科目は、学部横断型課題解決プロジェクト、メディア社会学表現ゼミ、社会調査方法論基礎、インターンシップである。また、日本における「社会的・文化的な性のありよう」（ジェンダー/gender）をめぐる最先端「男性学」（Men's studies）の研究者として、マスメディアにも数多く取り上げられ、武蔵大学学園祭（白雉祭）では、山寄哲哉学長、コラムニストのジェーン・スー氏とともに講演会「変わる社会／変わらない恋愛観」に登場し、学生にも関心の高いテーマを扱い、注目されている。

田中助教は、学問として社会学の真の魅力に到達するために、社会学の基本であるリテラシーの大切さを授業で説いている。例えば、社会調査士の資格が取得できる「社会調査方法論」の授業では、まず調査のやり方を正しく理解させ、調査目的や対象者によって、どのように調査手法を用いるかの基本を教えている。それらを実学的に教えることで、学生のリテラシーを高められるよう心がけているという。

また、田中助教は、武蔵大学の建学の三理想「自ら調べ自ら考える」に基づき、学生が自分なりに調べて考えられるようにすることで、社会的なものの見方や情報収集のやり方を習得できるように工夫されている。ここに武蔵大学らしい社会学部の特色が表れている。

FDとして特筆すべきことは、関連する他の科目の教員と頻繁に情報交換・情報共有をしているということである。これらの授業に対する考えや取り組みは、3学部の垣根を越えた「学部横断型課題解決プロジェクト（三学部横断ゼミ）」の担当経験によるものと思われる。この授業では、実際の企業担当者との接触や他学部の学生との協働を通じて、学生に多様な視点を身に付けさせるため、教育的な効果を支える教員間の情報共有が不可欠となるからである。

教員間の情報共有は、個々の授業の設計だけでなく、授業間での内容の重複や不足を把握し、扱うテーマに関連性を持たせるなど、授業改善や授業開発を行う上でも重要であることを指摘されていた。

田中助教からは、近接領域の学問だけでなく、より広い範囲での教員間の情報共有や接続教育の強化についても提案があり、今後の武蔵大学のFDの最優先課題として検討する必要性を感じた。

（文責：FD 研究員 新宅 広二）





## 講演会『変わる社会／変わらない恋愛観』

山崎学長、田中先生、ジェーン・スーさんのスペシャルコラボ  
日時：11月2日（日）15:30～17:30



学園祭（白雉祭）での講演会「変わる社会／変わらない恋愛観」